様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21　年　3　月　31　日現在

研究種目：　基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５２０３９４
研究課題名（和文）　英語における動名詞の時制解釈と統語構造—経済性の観点から

研究課題名（英文）

研究代表者
有村　兼彬（ARIMURA KANEAKI）
甲南大学・文学部・教授
研究者番号：７００６８１４６

研究成果の概要：
本研究は、生成文法理論に基づいて、英語の動名詞の形式と解釈（特に時間解釈）について研究を行った。研究は、生成文法理論そのものに関する研究と動名詞という個別現象の研究を同時並行的に進め、英語の動名詞の時間解釈は、ある種の経済性（economy）の原理によって制限されていることを論じた。また、動名詞補部は派生名詞（derived nominal）との共通性をかなり多く持っており、特に時間解釈の面における共通性を指摘した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	500,000	0	500,000
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,500,000	300,000	1,800,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・英語学
キーワード： economy, gerund, perfect gerund, temporal interpretation, pleonastic nature of *having*, nominalization, derived nominal

１．研究開始当初の背景

05 年度の申請時において、すでに英語の動詞名の興味深い特徴として遡及的動名詞（retroactive gerund）について考察していた。遡及的動名詞は、文の主語が動名詞の目的語として解釈される形式（The city deserves visiting twice.）を言う。この時に気付いたことは、動名詞 visiting が表す時間が現在から未来を指示するが、過去時を表すことはないという点であった。しかし、一方では、He regrets visiting the city. のように動名詞は環境によって過去時を表し得るのである。申請時においては、このギャップが何によってもたらされているのか不明であった。一方で、動名詞が過去時を表すためには完了形が用いられることは文法書等が教えるところである（He regrets having visited the city.）。完了動名詞が選択的であるというこの事実は「経済性の原理」によって説明できるのではないかという予測を立て、動名詞の時間解釈の特徴を検証しようと思った。

２．研究の目的

言語において経済性への配慮は重要である。Chomsky (1981)は、John would much prefer (his) going to the movie.のような場合、goingの主語がJohnであれば同一指示的代名詞hisを使うよりも、それを発音しない方法（つまり音声形式を持たないPRO）を選択せよという「代名詞回避原理」(Avoid Pronoun Principle) を示唆した（この原理によって、hisはJohn以外の人物に言及するという解釈が保証されることになる)。この原理は、発音せずに済むところで発音するという無用の努力は極力回避せよというように解釈することができる。いわば「不必要なエネルギーを使うな」ということになる。この原理は、今日的用語で言い換えると「経済性の原理」(Economy Principle) と言うことができるのだが、動名詞における時間解釈にも有効であると想定し、それを動名詞の使用法をインターネットで詳細に調べ、ある一定の方向性が明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

本研究を行うに当って次のような方法をとった。(1) 動名詞を補部として取る動詞の一覧表を作り、実際の言語運用においてどのように用いられているか、特に動名詞の表す時間がどのように解釈されているか精査し、そのデータに関してJoseph Emonds教授（前神戸松蔭女子大学）と議論を交わした。(2) 動名詞は動詞の名詞化形のひとつであるが、それをよりよく理解するためにはもう一つの名詞化形である派生名詞の統語論・意味論を研究する必要があると感じ、その研究を同時並行的に行った。(3) 関係論文を集め内外の研究者の知見を学んだ。(4) 作成した論文を学会およびフォーラム（後述）において発表した。

４．研究成果

(1)動名詞の研究（”On the Pleonastic Nature of the Perfect Gerund in English”）：**① 動名詞の統語構造**。動名詞はその時間解釈の面から見ると定型動詞を含む「文」というよりも「名詞句」としての類似性が高いという点に注目して、その統語構造は派生名詞同様にTPを持たず、DP-AspP-vP-VPという内部構造を持つと仮定した。論文執筆段階では気付かなかったが、ひょっとすれば一般的に動名詞と一括りにされるものはいくつかの種類に分けられ、それぞれの内部構造が異なっている可能性があるのかも知れない。そのうち名詞性の高いものがTPを含まないものと捉えることも可能だろう。この点についてはこれからの問題であるが、少なくとも、動名詞にはTPがあるという一般的な捉え方に一石を投じた。**② 動名詞の時間解釈のメカニズム**。先述のように動名詞にはTPがないとした場合、動名詞句は時制を持たないのであるから、独自の時間指定ができないことを意味する。しかし、動名詞は動詞を中心とする形式であるからには、出来事（event）を表し、出来事であるからにはそれが生じた時間が特定されない限り完全な解釈は得られない。動名詞が表す時間の解釈はすべて主節の動詞が決定するということになる。例えば、regretという動詞はその補部の内容が過去のことでなければならないが、一方tryであればその補部は未来であろう。このように、動名詞を取る動詞は内在的に補部に対する時間指定に関する情報を持っていると考えられる。これまでの研究においては、Stowell (1982)を除くとこの辺りが曖昧であったが、それを明示的な形で明らかにしたと思う。**③ 完了動名詞 (perfect gerund)**。例えばregretの補部の動名詞は[1] He regrets having visited him.とも[2] He regrets visiting him.とも言える。先述の仮定によれば、regretは、その補部に過去時を要求する動詞であるから、それが過去時であることを示すために[1]のようにhavingを用いる必要はないはずである。この場合、補部の動詞がvisitという行為動詞である点が重要である。つまり、[2]においてvisiting himを現在と解釈することは英語のシステムとして不可能で、英語の行為動詞は現在進行している事態を述べるのに使うことは不可能である。したがって、[2]のvisiting himは過去としか解釈できないわけである。一方、動名詞補部が状態動詞の場合は完了動名詞が好まれるとする文法書もあるが (Quirk et al. (1985))、インターネット検索によれば必ずしもそうとは限らず、状態動詞を補部にとる場合も単純形（havingを伴わない形式）で過去時を表し得ることを発見した（[3] He confessed to being a vegetarian.)。この文は、彼が告白したことが「(その時) 菜食主義者である」ことでも、「(それ以前に) 菜食主義者であった」ことでもあり得るという意味で曖昧である。つまり、後者の解釈は … having been a vegetarianとした場合と同じ解釈になる。そのような例をもとに、経済性の原理による派生間の競合関係を検討した。その結果、完了助動詞havingは、主節動詞の意味論によって決定されている内容を二重に表示する冗語要素 (pleonasm, pleonastic element) と位置付けられることを示した。つまり、了解済みのことをhavingという形式で発音するという無用の努力を要求した形式ということになる。また、that節等の従属節において定形の過去完了形も省略可能な場合があることが指摘されているが、もしそうであれば完了形の選択一般に関して経済性が関与している可能性があることも指摘した。この問

題を正面から取り組んだのは本研究が初めてである。**④ 更なる問題。**英語の非定型完了形は複雑である。特にこの点で強調したことは、本来動名詞補部を取らないとされるケースで動名詞が生じることがあるということである。例えば、[4] He avoided having got caught. は非文とされているが (Kiparsky and Kiparsky (1971))、[5] … could not avoid having been positively affected by …のような例はインターネット検索では決して珍しくない。もし[5]の容認度が高く、[4]が非文法的であるとするならば、それは仮定法の could に起因すべきであるだろうが、法がなぜここで関連するのか疑問として残る。さらに、非叙実的述語 look forward to が動名詞補部を取ること（I'm looking forward to having been there from the start.）を発見した。その文法的ステイタスは不明であるが、未来完了を思わせる事例であり、同じく非叙実的述語である imagine が動名詞補部を取る例（I imagine having been a vegetarian.）を合わせて考えると意味論的に興味深い問題があると思われる。

(2) 遡及的動名詞と派生名詞（「名詞句表現における目的語解釈」）**①問題点。**英語の動名詞構文には例えば The city is worth visiting twice. のように、全体の主語 the city が動名詞 visiting の目的語として解釈される現象が見られる（伝統的にこれは遡及的（retroactive）動名詞と称されている）。本研究で注目したことは、例えば、The site deserves reconstruction. の場合のように動名詞を派生名詞に変えても同じ解釈が可能であるという点である。つまりこの例において the site は deserves の主語であると同時に派生名詞 reconstruction に対する意味上の目的語の関係にある。このことは、これまで考えられてきた以上に動名詞は派生名詞と類似した内部構造を共有していることを示していると思われる。**② 動名詞と派生名詞の構造**。遡及的解釈を許容する動詞が補部に取る動名詞及び派生名詞のアスペクト特性を調べてみると、不可能なケースは状態動詞（State Verb）と達成動詞（Achievement Verb）であり、活動動詞（Activity Verb）と完成動詞（Accomplishment Verb）が可能であるように思われる。両者とも Aspect Phrase あるいは vP を有していることを示唆するものである。従来、動名詞は TP を（従って vP/VP を）含み、派生名詞は vP/VP を含まず最初から DP/NP を構成するとされてきたが、この考え方では捉えられない事実である（van Hout & Roeper (1998), Fu, Roeper & Borer (2001), Alexiadou (2001), Alexiadou, Haegeman & Stavrou (2007)）。更に、この結論を補強するものとして、do so テストによる結果がある： This scoundrel deserves a prompt conviction by the jury; I believe that there is no alternative to *doing so*. この場合、doing so の先行詞は prompt conviction と解釈される。do so が認可されるためには先行詞が VP を含まなければならないという仮定に従うならば、conviction という派生名詞は VP に支配されていることを示すことになる。本論文における重要な指摘は、動名詞は従来考えられていたよりも名詞性が強く、派生名詞は動詞性が強いということである。③残された問題。本研究では動名詞は TP を欠くと考えたが、動名詞は派生名詞と違って not による否定が可能である。これまでの否定に関する研究において、not は Tense オペレータと関連すると考えられてきたが、この点からするともう少し考えなければならない問題である。また、派生名詞は VP によって支配されるとする結論が正しいとすれば、派生名詞は副詞による修飾を許容してしかるべきであるが、事実はそうなっていない。Alexiadou, Haegeman & Stavrou (2007) ではスラブ語系の言語ではそれが可能であると述べられているが、英語の派生名詞が副詞を認可しないと言う事実はもっと真剣に取り組まなければならない問題であるように思われる。

(3) 融合という概念に関して。2008 年 5 月に日本英文学会編集委員会から Fortuny (2008) *The emergence of order in syntax.* の書評依頼を受けた。これは直接動名詞研究に関連するものではないが、生成文法の昨今の進展を学ぶ上で有益である。Fortuny は、「補文標識-痕跡効果」(that trace effects) や「虚移動仮説」(Vacuous Movement Hypothesis) 融合（syncretism）という観点から再検討しようとした。従来 CP/TP の間には密接な関連があることが指摘されている（例えば Chomsky は C-T 継承（C-T inheritance）という観点からこれを捉えようとした）が、Fortuny は理論的・経験的事実に基づいてこの仮説を退け、氏が主張する融合という概念を用いて説明しようと試みた。Rizzi (1999) 以降左端（Left Periphery）が注目されており、TP, CP にはこれまで考えられている以上の複雑な機能範疇が存在するとされている。4 月 1 日に投稿した書評は目下審査中のため本研究に含めていないが、昨今の研究の動向を視野に入れながらこれから研究を進める方向性が得られたと思う。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

(1) Kaneaki Arimura、" On the Pleonastic

Nature of the Perfect Gerund in English”、甲南大学紀要文学編（甲南大学）、査読なし、第155巻、2009年、pp. 33-60.

(2) 有村兼彬、「名詞句内における目的語解釈」、JELS（日本英語学会）、査読あり、第25巻、 2008年、pp. 11-20.

〔学会発表〕（計　3　件）

(1) 有村兼彬、動名詞の時間解釈、日本英文学会関西支部、2009年12月20日、関西学院大学

(2) 有村兼彬、名詞句内における目的語解釈、日本英語学会、2007年11月11日、名古屋大学

(3) Kaneaki Arimura、Temporal Interpretation in English Gerunds、KACL (Kansai Area Circle of Linguistics)、2007年1月26日、甲南大学

〔図書〕（計　1　件）

有村兼彬（共著）、英宝社、英語学へのファーストステップ（改訂版）、2009年、総頁225（うちpp. 1-71、及び全体の監修）。

６．研究組織

(1)研究代表者

有村　兼彬、甲南大学文学部英語英米文学科、教授、研究者番号：70068146

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし